

24. 骨シンチにおける肋骨数珠状陽性像の検討

仙田 宏平 大島 治泰 斉藤 正人
鈴木 祥夫 佐久間隆廣

(国立名古屋病院・放)

肋骨3本以上にわたり体軸方向に連続した数珠状の多発性 hot spot (以下、数珠状陽性像) の機序を検討した。対象は最近骨シンチを施行した1,531症例2,164回検査のうちで、この所見を見た14症例28回検査(約1%)で、内訳は男性7,女性7症例、年齢 64.9 ± 13.8 (38~85)歳であった。基礎疾患は癌腫7,多発性骨髄腫2,良性疾患5症例であった。数珠状陽性像は5症例で5本以上の肋骨にわたり、8症例で3箇所以上に見られた。部位は前部または前外側部、肋軟骨接合部、後部肋骨角付近の順であった。7症例で過去1年半以内に胸部打撲の既往があり、良性疾患4症例で骨粗鬆症を合併し、悪性腫瘍3症例で検査時点の骨髄生検が陰性であった。また、再検できた6症例で数珠状陽性像の消退を認めた。したがって、数珠状陽性像は、主な機序が打撲骨折と考えられるが、肋骨転移との鑑別に注意を要する。

25. 抗CEAモノクローナル抗体およびPETが診断に有用であった直腸癌再発の2例

太田 豊裕 伊藤 健吾 加藤 隆司
村元 秀行 西野 正成 新畑 昌滋
石垣 武男 (名古屋大・放)
田所 匡典 (刈谷総合病院・放)
池田 充 (名古屋大・医療情報部)
伊藤 勝基 仲田 和彦 (同・二外)

抗CEA抗体であるCEA102をIn-DTPA coupling法により標識した放射免疫シンチグラフィとPETを施行し、転移部および局所再発部に良好な集積を見た2症例を経験した。In標識免疫シンチグラフィは、I標識に比べ、良好な画像が得られ、さらにPETとの比較が可能であり、直腸癌の再発診断の有力な手段となると思われた。また、CEA102は、抗体投与1日後でもより良好な集積が認められ、物理的半減期の短い ^{99m}Tc 等による標識も可能であると思われた。